

## テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「向き合う心」

新潟県立村上高等学校2年 伴田 琴美

小学校二年生だった。私は、学校の帰り道を友達と歩いてた。そのとき、目の前から男性が歩いてきたのを見て、友達の足は止まった。

「あの人おかしい。怖い。どこの人だろう。」

馬鹿にしたような声だった。友達がそう言った男性は、私の叔父だった。幼い頃、叔父の喋り方を聞いて、変だと思ったことは何度かあったけれど、こういう障がいを持っていることをいつも親から言われていて分かってたから、叔父のことをそういうふうには思わなかった。でも、私は友達のその言葉を聞いたら、男性が叔父であることが恥ずかしくなってきた。もし、友達にこの男性は私の叔父だと言ったら、嫌われるんじゃないか。そう考えたら、

「そうだね。どこの人だろう。」

そんなことしか私の口からは出てこなかった。友達はただうなずいて、また歩き出した。私の心は罪悪感と安心感が入り交じっていた。その日から私は、家の中で叔父に会っても言葉も交わさなくなり、話しかけられても答えなくなつた。悪いことをしているのは自分でも分かっていたし、嫌だつたけれど、友達のことを思い出したらやめようとは思えなかった。叔父から逃げることで精一杯だった。でもしだいに私が私でなくなっていく気がしてすごく胸が苦しくなっていた。

中学三年生の夏。職場体験の時期になった。特に興味を持っていたこともなく、どうしようかと、職場体験一覧表をめぐっていたら障害者支援施設という所が私の目にとまった。

「障害者支援施設…？叔父のような人がたくさんいるところか」。私のページをめくる手はびたりと止まった。そこに行つて、今の自分と向き合ってきてほしいと、心の中の私に言われたような気がした。施設に行くくと、叔父のような知的障がいを持った人がたくさんいた。体

験の一日目は、利用者と運動をしたり、髪を乾かしたり、一緒に折り紙をしたりした。利用者と上手にコミュニケーションを取る事ができるのだろうかと不安だつたけれど、気づいたら私は自然に溶け込み、利用者の横で、一緒に時間を楽しんでいた。叔父とはこんなふうに接したことがなかったからすごく新鮮な感じがした。体験最終日、施設を後にしようとした私に利用者が声をかけてくれた。

「また来てね。ここにいとすごく寂しいんだけど誰かが来てくれると嬉しいんだ」。

真つ直ぐな笑顔で私にそう言った。嬉しかった。私の頭にはその瞬間、この施設に来る前のそれまでの自分の考えを思い出した。私は小学校二年生のあの出来事からずっと、障がい者である叔父と私は違う人間なんだと言い聞かせて、壁を保ちながら生きてきた。でも、違つた。叔父と私は同じ人間であり、そこには最初から壁なんて存在してなかった。今までの自分がすごく恥ずかしくなつた。私は最低なことをしていたんだ。もう、胸がいっぱいになった。私の泣きそうな顔を見て、皆不思議そうな顔をしていた。私はありがとうごさいましたと言つて深く礼をして、その場を後にした。

「友達に嫌われるから」。そんな理由で、家族である叔父にあんな態度を取ってしまった。自分のために。少しの出来事から、私の心の中では差別の心が生まれて、大きくなつていった。でももう、あんな気持ちには私にはない。以前より叔父と話すようになったし、距離もずつと縮まった気がする。もし、あるとき、友達に嫌われてでも「そんなことを言つてはいけないよ」と、一言だけでも言うことができたらならば、その子も私も、何かが変わつていたはずだ。

差別というのは小さなきっかけでも身近に起きてしまう。自分の心も相手の心も苦しめる。でも、自分の中の「向き合う心」に気づけたとき、それは大きく変わる。私は、これからもこの気持ちを持ち続けたい。